

アサーションと文化的自己観，対人恐怖の関連 — 会話完成テストと質問紙法による相関研究 —

Relationships among assertiveness, construal of self and *taijin kyofu*:
A correlational study conducted by the use of a discourse completion test
and questionnaires

三田村 仰¹

Takashi MITAMURA

要 約

アサーションは率直な自己主張であるが，わが国に合ったアサーション・トレーニングをおこなっていく上では，日本文化のもつ志向性についても意識していくことが有用と考えられる。本研究の目的は，アサーションと文化的自己観，対人恐怖の関連について，質問紙法と会話完成テストを用いて検討することであった。専門学校生136名を対象に質問紙と会話完成テストをおこなった結果，アサーションは，相互独立的自己観と正の相関，相互協調的自己観と負の相関，対人恐怖と負の相関を示した。また，アサーションは会話完成テストによって測定された自己主張時の文字数と負の相関を示した。本研究の結果からは，アサーションが相互独立的自己観の傾向に親和的な概念であることが示唆された。日本文化により適合的なアサーション・トレーニングについて検討していくことの必要性が議論された。

キーワード：アサーション，文化的自己観，対人恐怖

問題と目的

アサーションとは自他を尊重した素直な自己主張であり，米国で生まれ発展してきた。平木（1993）は，アサーションという米国由来の概念を「自他を尊重するさわやかな自己表現」と

いう形容によって，アサーションの本質を維持しつつも日本人にも馴染み易い形でわが国に導入した。同様に，わが国のアサーションに関する研究者や実践家は，アサーションという発想をいかに日本文化に適合させるかについて積極的な議論をおこなってきた（e.g., 平木，2004；伊藤，2001）。しかし，アサーションという構成概念のあいまいさも手伝って，日本文化に適合したアサーションとはなんであるかについては未だ合意が得られていない。また日本文化に合ったアサーションを検討するにあたっては，アサーションという概念を直接扱った研究のみを扱うに留まらず，広く自己主張に関わる領域

¹ 1) 京都文教大学臨床心理学部 (Kyoto Bunkyo University, Department of Clinical Psychology)
2) 同志社大学心理臨床センター (Doshisha University Center for Clinical Psychology)
3) 同志社大学実証に基づくトリートメント・センター (WEST) (Center for Wing of Empirically Supported Treatments (WEST) Doshisha University)

(e.g., 精神医学 (Okano, 1994), 文化心理学 (Takai & Ota, 1994), 教育と発達 (東, 1994), 社会言語学 (Brown & Levinson, 1978)) を精査することが有用と考えられる。本研究では、アサーションと日本文化的な傾向との関連について、関連領域の知見を踏まえ検討をおこなう。

アサーションに関連する日本文化的な傾向

文化的自己観 Markus & Kitayama (1991) は、心理学領域における文化の要因の重要性を示すため、欧米文化に代表される「相互独立的自己観 (independent self-construal)」と日本を含む東洋で優勢な「相互協調的自己観 (interdependent self-construal)」という2つの異なる世界観 (文化的自己観) を概念化した。Markus & Kitayama (1991) によれば、相互独立的自己観は、自己を他者から独立した存在として捉える自己観である。相互独立的自己観の傾向が強い文化において、人は、自らを独自性ある個人として捉え自己主張することが重要とされ、自尊心を高めることや自らの権利に自覚的になることに強い関心がもたれる。一方の相互協調的自己観は、自己を他者との関係性のなかで捉えようとする自己観である。相互協調的自己観の強い文化では、周囲と調和することが重要な関心事とされ、自己主張は慎まれる傾向にある。したがって、個人におけるアサーション傾向 (率直に自己主張する傾向) は相互独立的自己観と親和的であり、相互協調的自己観と違和的であると考えられる。

対人恐怖 対人恐怖とは、社会心理学においては対人不安 (Schlenker & Leary, 1982) やシャイネス (Cheek & Buss, 1981), 臨床心理学や精神病理学においては社交不安障害 (Liebowitz, Gorman, & Fyer, 1985) として扱われる概念とほぼ類似の概念である (Nakamura, 2002)。なかでも取り立てて“対人恐怖”といった場合には、その日本の特性、すなわち、他者への配慮の懸念が強調される (Kirmayer, 1991)。他者配慮への懸念とは、

例えば「相手に迷惑をかけるのではないか」「相手を不快にさせるのではないか」といった他者を気遣うことからくる対人場面での不安である。社交不安や対人不安が「自らが否定的に評価されること」への不安を主題とするのに対し、対人恐怖では「他者に何らかの負担を掛けること」への不安を主題とする。また、日本文化において対人恐怖は必ずしも精神疾患を意味するものではなく、一般的な心性であるとされている (堀井・小川, 1996)。対人恐怖を自己観との関連から考えると、対人恐怖は他者指向という点で相互協調的自己観と親和的であり、相互独立的自己観とは違和的であると考えられる。文化的自己観と対人恐怖との関連について検討した研究によれば、実際に対人恐怖は、相互独立的自己観と負の関係、相互協調的自己観と正の関係にあることが示されている (Dinnel, Kleinknecht, & Tanaka-Matsumi, 2002)。対人恐怖とアサーションとの関連については、それほど多くの研究はないが、対人恐怖もしくは対人不安とアサーションは一貫して中程度から強い負の相関が認められている (e.g., 三田村・横田, 2006, 2007)。したがって、対人恐怖の傾向とはアサーションが抑制されたノン・アサーティブ (非主張的) な傾向に近いと捉えることができる。

アサーションに関する社会言語学的な側面

アサーションを特徴づける発言の仕方とは、発言が直接的・明示的であることや余計な謝罪を含まないことがあげられる (Booraem & Flowers, 1978)。一方、社会言語学の領域では、人はさまざまな文化を超えて普遍的に、状況により発言の仕方を調整しているとされる (ポライトネスの普遍理論; Brown & Levinson, 1978)。人は丁寧に自己主張しようとするときほど、より間接的で冗長な言語的自己主張をおこなうのである。実際、三田村・松見 (2010c) は、研究参加者の自由記述によって得た自己主張は、自己主張することの正当性が低い文脈では、それが高い文脈よりもその文字数と謝罪表現数が多くなり、より間接表現が多用されるこ

とを示した。アサーションという発言の形態は、文脈が変わることによって自然とノン・アサーションの発言形態に変化することが確認されたのである。本研究でも三田村・松見 (2010c) に倣い、自由記述による自己主張の文字数や謝罪表現数について検討をおこなう。

また、文化と文脈の関連については、欧米は低文脈の文化であり、日本は高文脈の文化であるとされている (Hall, 1976)。つまり、ある振る舞いの持つ社会的な意味が、欧米では状況や関係性といった文脈に比較的左右されにくく、一方日本では状況や関係性といった文脈により大きく影響されると考えられている。したがって、日本的な特性の強い個人ほど、自己主張をおこなう際の正当性の文脈の違いに応じ、より言語的自己表現を変化させると考えられる。これについては三田村・松見 (2010c) がおこなった方法を用いて、自由記述による自己主張の文字数について、正当性の高低の文脈での変化量を求めることで検討することが可能である。

さらに、Chiauszi & Heimberg (1986) は、依頼を断るアサーションにおいて、元々がアサーティブな個人の群とノン・アサーティブな個人の群を比較して、ノン・アサーティブな個人は、アサーティブな個人よりも、相手からの依頼を妥当なものとして認知しており、断りづらさを知覚することを示した。つまり、ノン・アサーティブな個人においては、アサーティブな個人と比べ正当性の判断に差があることが示された。したがって、日本文化的な傾向の強い個人ほど相手からの自己主張をより正当と捉えると考えられる。さらに、Hall (1976) による欧米は低文脈の文化で、日本は高文脈の文化であるという主張に従えば、相互協調的自己観の傾向の強い個人ほど自己主張の正当性の文脈の変化に応じて、よりその正当性の認知を変化させると考えられる。

以上を踏まえ、本研究では次の仮説を検証した。

仮説 1-1：アサーションは、相互独立的自己観と正の相関、相互協調的自己観と負の相関関係にある。

仮説 1-2：アサーションは、対人恐怖と負の相関関係にある。

仮説 2-1：自由記述による自己主張時の文字数および謝罪表現数は、アサーションおよび相互独立的自己観と負の相関関係にあり、対人恐怖および相互協調的自己観と正の相関関係にある。

仮説 2-2：自己主張の正当性の高低の文脈間における文字数および謝罪表現数の差は、アサーションおよび相互独立的自己観と負の、対人恐怖および相互協調的自己観と正の相関関係にある。

仮説 3-1：自らの自己主張に対する正当性の評価は、アサーションおよび相互独立的自己観と正の相関にあり、対人恐怖および相互協調的自己観と負の相関関係にある。

仮説 3-2：自己主張の正当性の高低の文脈間における自らの自己主張に対する正当性の差は、アサーションおよび相互独立的自己観と負の、対人恐怖および相互協調的自己観と正の相関関係にある。

方 法

集団式で質問紙尺度および会話完成テストを複数回に分けて実施した。参加者は研究参加に同意の得られた専門学校生136名（男子51名、女子85名、平均年齢19.74歳）であった。

1. 質問紙尺度

1) Self-Construal Scale (SCS) : Singelis (1994) が作成した尺度。相互独立的自己観を測定する12項目 (INDE) と相互協調的自己観を測定する12項目 (INTER) の計24項目からなる。Dinnel et al. (2002) で用いられた日本語版であった。

2) Rathus Assertiveness Schedule (RAS) : 英語圏の研究では古くから最も頻繁に使われる30項目からなるアサーションの測定尺度で, Rathus (1973) が作成したものの日本語版であった (鈴木・叶谷・石田・香月・佐藤, 2004)。

3) *Taijin Kyofusho Scale* (TKS) : 日本において, 対人恐怖症患者と非臨床群を最も弁別する項目や対人恐怖症の診断的症候を記述した項目からなる尺度である (Kleinknecht, Dinnel, Kleinknecht, Hiruma, & Harada, 1997)。各項目は, 他者を不快にさせたり当惑させるという懸念を測定する。Dinnel et al. (2002) で用いられた日本語版の31項目であった。

2. 会話完成テスト (Discourse Completion Test)

本研究では Beeb, Takahashi, & Uliss-Weltz (1990) の会話完成テストを参考に三田村・松見 (2010c) が作成した3場面からなる会話完成テストを実施した (Appendix 参照)。自己主張の3場面はそれぞれ, 「飲み会の誘いを断りたい場面」「貸したお金を返して欲しい場面」「アルバイトのシフトを交代して欲しい場面」であった。更にこれら3場面には, それぞれ自己主張の正当性が高い場面 (正当性高文脈), 低い場面 (正当性低文脈) が設定されていた。たとえば, 「アルバイトのシフトを交代して欲しい場面」の正当性高文脈では「ちなみに, あなたはこれまで同様の場面でそのあるアルバイト仲間に頼まれた際, アルバイトを代わってあげたことが何度もあります」, 正当性低文脈では「ちなみに, あなたはこれまで同様の場面でそのあるアルバイト仲間に頼まれた際, アルバイトを代わってあげたことが一度もありません」という教示をそれぞれおこなった。したがって各参加者は, 場面1から3のそれぞれ正当性の高・低両文脈 (計6場面) について, 自由記述で回答した。高文脈と低文脈の提示順序は個人ごとに無作為に割り当てた。参加者は「それぞれの状況で実際, 自分が言うように回答し

てください」と教示を受け, 質問紙に自由記述で回答をおこなった。参加者の自筆による自由記述をテキスト入力するにあたっては, 宇佐美 (2007) を参考に漢字かな混じりでおこなった。その際, 同じ単語が参加者によって漢字・かな・カタカナの表記のゆれが見られたため, 基本的に漢字に揃え (e.g., 「こんど」→「今度」), 場合によって得られた記述のなかでの多数派の表現に揃えた (e.g., 「本間に」「本真に」「ホンマに」→「ほんまに」)。

分析方法 参加者の回答について, その文字数と謝罪表現数について分析をおこなった。謝罪表現としては, 「すみません」(「すまません」), 「悪い (けど)」, 「ごめん」, 「ゴメン」, 「申し訳 (ない)」を抽出した。

3. 自らの自己主張における正当性の認知

参加者は, 会話完成テストに回答後, 各場面の正当性の高低両文脈における自らの自己主張に対する正当性について, 「完全に正当 (6)」から「完全に不当 (1)」の6件法で回答した。

結 果

分析にあたって, 文章完成テストで「依頼・断りができない」旨を回答したデータもしくは依頼・断り以外のセリフを書いた回答 (7名) を除いた。更に文章完成テストにおける文字数が平均 $\pm 2 SD$ から外れた回答 (5名) を除き, 最終的に124名のデータについて分析をおこなった。

1. 質問紙尺度間の関連

各尺度の信頼性係数は, それぞれ $\alpha = .636 \sim .941$ であった。各尺度得点における相関係数を算出した結果, RAS は, INDE と有意な正の相関, TKS および INTER と有意な負の相関を示した。また, TKS と INDE とで有意な負の相関を示した (Table 1 参照)。

Table 1 各尺度間の相関係数および各尺度の信頼性係数 ($N=124$)

	RAS	INDE	TKS	INTER
RAS	—			
INDE	.58**	—		
TKS	-.52**	-.41**	—	
INTER	-.23**	.12	.13	—
<i>M</i>	93.81	52.81	94.82	59.02
<i>SD</i>	15.65	8.96	30.97	7.83
α	.64	.94	.76	.71

Note. RAS: Rathus assertiveness Schedule, INDE: Independent self-construal subscale, TKS: Taijin kyofusho scale, INTER: Interdependent self-construal subscale.

** $p < .01$, * $p < .05$.

2. 言語的自己主張方略と質問紙尺度の関連

Brown & Levinson (1978) によれば人は相手に配慮し、丁寧に自己主張しようとするほど間接的で冗長な言語表現を用いる。つまり、言語的自己主張における文字数（冗長さ）は、丁寧さの指標であると考えられる。一方、本研究で得られた文字の中には正当性の高文脈において、丁寧さとは異なる、批判や正当性の指摘への言及も含まれている。そこで、「バイトのシフト交代」における恩もしくは貸しを指摘す

るセリフ (e.g., “前代わってあげたし”), 「返済請求」における急かす台詞 (e.g., “早く”) と非難するセリフ (e.g., “返せ!”), 「飲み会の誘いの断り」における非難もしくは前回参加したことを指摘するセリフ (e.g., “前は今回だけって言ったやん”) の文字数をそれぞれ差し引いた文字数を算出した。これを以下、「文字数」とする。正当性高文脈の文字数と正当性低文脈の文字数および謝罪表現数の差の絶対値を算出し、「文字数の差」および「謝罪表現数の差」とする。正当性高・低両文脈の文字数および謝罪表現数と文字数の差および謝罪表現数の差についての基礎統計量を Table 2 に示す。

RAS, TKS, INDE, INTER の各尺度得点について正当性高・低両文脈の文字数と謝罪表現数との相関係数を算出した。その結果、RAS と文字数（高・低両文脈）および謝罪表現数（高文脈）の間に有意な負の相関が示された。INDE と文字数（高文脈）の間に有意な負の相関が示された。TKS と文字数（高文脈）との間に有意な正の相関、INTER と謝罪表現数（低文脈）の間に有意な正の相関が得られた (Table 2)。正当性の文脈の高低による文字数および謝罪表現数の差との間にはいずれの尺度得点も有意な相関はみられなかった。

Table 2 質問紙尺度得点と談話完成テストにおける文字数および謝罪表現数との相関係数 ($N=124$)

	文字数			謝罪表現数		
	正当性 高文脈	正当性 低文脈	文脈間 の差	正当性 高文脈	正当性 低文脈	文脈間 の差
RAS	-.22*	-.21*	-.06	-.22*	-.15	.17
INDE	-.27**	-.24*	-.04	-.08	-.13	.02
TKS	.18*	.10	-.04	.07	.05	.02
INTER	.11	.12	.05	.15	.20*	.06
<i>M</i>	55.44	105.90	51.19	1.03	1.74	1.02
<i>SD</i>	27.07	35.42	29.28	1.05	1.26	.99

Note. RAS: Rathus assertiveness Schedule, INDE: Independent self-construal subscale, TKS: Taijin kyofusho scale, INTER: Interdependent self-construal subscale, 正当性高文脈：自己主張の正当性が高い場面, 正当性低文脈：自己主張の正当性が低い場面.

** $p < .01$, * $p < .05$.

3. 自らの自己主張に対する正当性の評価と質問紙尺度の関連

自らの自己主張に対する正当性の評価についての正当性高文脈, 正当性低文脈それぞれで合計得点を算出しそれぞれ「正当性の評価 (正当性高・低文脈)」得点とした。更に, 正当性高文脈の正当性の評価得点と正当性低文脈の正当性の評価得点の差の絶対値を算出し, 「正当性の評価の差」とした。

正当性の評価の基礎統計量を Table 3 に示す。RAS, TKS, INDE, INTER の各尺度得点における正当性の評価および正当性の評価の差との相関係数を算出した。その結果, RAS において, 正当性の評価 (正当性低文脈) との間に有意な正の相関, 正当性の評価の差との間に有意な負の相関がみとめられた。TKS においては, 正当性の評価 (正当性低文脈) との間に有意な負の相関がみとめられ, INTER においては, 正当性の評価 (正当性低文脈) との間に有意な負の相関, 正当性の評価の差との間に有意な正の相関がみとめられた。(Table 3)。

Table 3 質問紙尺度得点と正当性の認知得点との相関係数 (N=116)

	正当性 高文脈	正当性 低文脈	文脈間 の差
RAS	-.02	.36**	-.24**
INDE	.04	.18	-.05
TKS	-.02	-.24*	.18
INTER	.03	-.20*	.23**
<i>M</i>	14.41	10.00	4.67
<i>SD</i>	2.51	2.41	3.09

Note. RAS: Rathus assertiveness Schedule, Inde: Independent self-construal subscale, TKS: Taijin kyofusho scale, Inter: Interdependent self-construal subscale, 正当性高文脈: 自己主張の正当性が高い場面, 正当性低文脈: 自己主張の正当性が低い場面, ** $p < .01$, * $p < .05$.

考 察

アサーションと文化的自己観, 対人恐怖

本研究では, 個人におけるアサーション傾向と日本文化的な傾向との関連を検討するため, アサーション, 文化的自己観, 対人恐怖の関連を検討した。その結果, 仮説 1-1 および 1-2 が支持された。つまり, アサーション傾向が強い個人ほど, 周囲との調和を求める志向性 (相互協調的自己観) や他者に負担をかけることに対する懸念 (対人恐怖) が小さく, むしろ個の独自性を重視する志向性 (相互独立的自己観) が強いことが示された。このことは, アサーションという発想が, 日本文化的な個人よりも欧米文化的な個人において親和的であることを示唆すると考えられる。

アサーションと言語的自己主張方略

本研究では自己主張時の文字数の多さを丁寧さの指標と捉え, アサーションと自己主張時の文字数および謝罪表現数との関連を検討した。その結果, 仮説 2-1 および仮説 2-2 が部分的に支持された。すなわち相互独立的自己観が強いほど文字数が短くなる傾向にあり, 対人恐怖の傾向が強いほど文字数が長くなる傾向が示された。また, アサーションが強いほど謝罪表現数が減り, 相互協調的自己観の強いほど謝罪表現数が増える傾向が示された。

文字数の多さを丁寧さや他者への配慮の指標と考えると, 本研究の結果からは, 対人恐怖の傾向が強い個人が配慮的であることとは対称的に, アサーションの強い個人はより気さくであると理解できる。また, 相互協調的自己観の強い個人が多く謝罪表現を用いるのに対し, アサーティブな個人が謝罪表現をより用いないという結果も, アサーションという欧米的な傾向と対人恐怖にみるような日本的, 配慮的傾向と対称的であると理解できるだろう。

アサーションと自己主張における正当性の評価

本研究では, 自らの自己主張の正当性の評価

とアサーション、対人恐怖および文化的自己観の関連を検討した。その結果、一部、相互独立的自己観と対人恐怖に関する個所を除き仮説3-1および仮説3-2が支持された。つまり、アサーションが強い個人ほど自らの自己主張をより正当であると評価し、反対に対人恐怖および相互協調的自己観が強い個人ほど、自らの自己主張の正当性をより低く評価する傾向があった。これは Chiauzzi & Heimberg (1986) の結果を支持するものであった。さらにこの結果は、アサーション・トレーニングにおいて、トレーナーが参加者に対し、我々は自己主張する権利をもっていると教えること (Alberti & Emmons, 1970) とも整合している。また、対人恐怖や相互協調的自己観の強い他者志向の個人においては、自らの自己主張を抑え集団の調和を維持することこそがより正当な行為だと捉えていることが理解できる。

日本文化により適合したアサーション・トレーニングへの示唆

本研究の結果は、概してアサーションという傾向が、相互独立的自己観に親和的なものであり、反対に、相互協調的自己観の強い個人や文化においては相反する志向性である可能性を示唆した。たとえば、相互独立的自己観が強く、よりアサーティブな個人や文化であれば、自らが自己主張することはより正当なことであり、当然のこととして簡潔に自己表現するかもしれない。しかしながら、相互協調的自己観が強くより他者配慮的な個人や文化であれば、人は自らの自己主張を集団の調和を乱す不当なものとして捉え、主張する際には謝罪表現を添えて、より冗長に自己表現するかもしれない。少なくとも、三田村・松見 (2010a) は、率直に自己主張するという発想は文化普遍的に望ましいというよりは、その自己主張を取り巻く文脈によってその価値や意義が生じることを論じている。既におこなわれている研究として「どういった文脈での自己主張が必要とされているのか」を詳細にアセスメントしたうえで、その状況の中で機

能していくようなアサーションをトレーニングするという試みもなされている (三田村・松見, 2010b)。今後、アサーションと文化との関連をさらに論じていくにあたっては、日本人のデータのみならず国際的なデータを含めた検討が必要である。

引用文献

- Alberti, R. E., & Emmons, M. L. (1970). *Your perfect right: A Guide to Assertive Behavior*. San Luis Obispo, California: Impact Publishers.
- 東洋 (1994). 日本人のしつけと教育—発達の日米比較にもとづいて— 東京大学出版会
- Beeb, L. M., Takahashi, T., & Uliss-Weltz, R. (1990). Pragmatic transfer in ESL refusals. In R. C. Scarcella, E. S. Andersen & S. D. Krashen (Eds.), *Developing communicative competence in a second language*. New York: Newbury House, pp.55-73.
- Booraem, C. D., & Flowers, J. V. (1978). A procedural model for the training of assertive behavior. In J. M. Whiteley & J. V. Flowers (Eds.), *Approaches to assertion training*. Monterey, California: Brooks Cole, pp.15-46.
- Brown, P., & Levinson, S. C. (1978). *Politeness: Some universals in language usage*. New York: Cambridge University Press.
- Cheek, J. M., & Buss, A. H. (1981). Shyness and sociability. *Journal of Personality and Social Psychology*, 2, 330-339.
- Chiauzzi, E., & Heimberg, R. G. (1986). Legitimacy of request and social problem solving: A study of assertive and nonassertive subjects. *Behavior*

- Modification*, 10, 3-18.
- Dinnel, D. L., Kleinknecht, R. A., & Tanaka-Matsumi, J. (2002). A cross-cultural comparison of social phobia symptoms. *Journal of Psychopathology and Behavioral Assessment*, 24, 75-84.
- Hall, E. T. (1976). *Beyond culture*. New York: Doubleday.
- 平木典子 (1993). アサーショントレーニング—さわやかな「自己表現」のために—日本・精神技術研究所
- 平木典子 (編) (2004). アサーション・トレーニング 現代のエスプリ 450 至文堂.
- 堀井俊章・小川捷之 (1996). 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, 20, 43-51.
- 伊藤弥生 (2001). 日本におけるアサーション像の探索的研究: アサーション・トレーニング参加者の個別面接を土台に 心理臨床学研究, 19, 410-420.
- Kirmayer, L. J. (1991). The place of culture in psychiatric nosology: Taijin kyofusho and DSM-III-R. *Journal of Nervous and Mental Disease*, 19-28.
- Kleinknecht, R. A., Dinnel, D. L., Kleinknecht, E. E., Hiruma, K., & Harada, N. (1997). Cultural factors in social anxiety: A comparison of social phobia symptoms and taijin kyofusho. *Journal of Anxiety Disorders*, 11, 157-177.
- Liebowitz, M. R., Gorman, J. M., & Fyer, A. J. (1985). Social phobia: Review of a neglected anxiety disorder. *Archives of General Psychiatry*, 42, 729-736.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 三田村仰・松見淳子 (2010a). アサーション(自分を尊重する自己表現)とは何か?—“さわやか”と“しなやか”, 2つのアサーションの共通理解を求めて— 構造構成主義研究, 4, 158-182.
- 三田村仰・松見淳子 (2010b). 相互作用としての機能的アサーション パーソナリティ研究, 18, 220-232.
- 三田村仰・松見淳子 (2010c). アサーションの文脈依存性についての実験的検討: 話し手と聞き手の観点から 対人社会心理学研究, 10, 77-86.
- 三田村仰・横田正夫 (2006). アサーティブ行動阻害の要因について—対人恐怖心性からの検討— パーソナリティ研究, 15, 55-57.
- 三田村仰・横田正夫 (2007). アサーティブ傾向と対人不安における選択的注意の関連についての研究 日本大学文理学部心理臨床センター紀要, 4, 43-50.
- Nakamura, K. (2002). The neurotic versus delusional subtype of taijin-kyofu-sho: Their DSM diagnoses. *Psychiatry Clin Neurosci*, 56, 595-601.
- Okano, K. (1994). Shame and social phobia: A transcultural viewpoint. *Bulletin of the Menninger Clinic*, 58, 323-338.
- Rathus, S. A. (1973). A 30-item schedule for assessing assertive behavior. *Behavior Therapy*, 4, 398-406.
- Schlenker, B. R., & Leary, M. R. (1982). Social Anxiety and Self-Presentation: A Conceptualization and Model. *Psychological Bulletin*, 92, 641-669.
- Singelis, T. M. (1994). The measurement of independent and interdependent self-construals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 20, 580-591.
- 鈴木英子・叶谷由佳・石田貞代・香月毅史・佐藤千史 (2004). 日本語版 Rathus assertiveness schedule 開発に関する研究 日本保健福祉会誌, 10, 19-29.
- Takai, J., & Ota, H. (1994). Assessing

Japanese interpersonal communication competence. *The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, **33**, 224-236.
宇佐美まゆみ (2007). 改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System

for Japanese: BTSJ) 2007年3月31日改訂版 『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度 科学研究費補助金 基盤研究B(2) (研究代表者 宇佐美まゆみ) 研究成果報告書

Appendix 会話完成テストにおける教示

場面1：アルバイトのシフト交代の依頼

「あなたはあるアルバイトをしています。急な用事であなたはどうしても来週アルバイトに出られなくなってしまいました。そこで、あるアルバイト仲間にシフト交代をお願いしたいと思っています。いまアルバイト場で、そのアルバイト仲間にシフト交代をお願いします。あなたなら何と言いますか。」

- a) 正当性高文脈「ちなみに、あなたはこれまで同様の場面でそのあるアルバイト仲間に頼まれた際、アルバイトを代わってあげたことが何度もあります。」
- b) 正当性低文脈「ちなみに、あなたはこれまで同様の場面でそのあるアルバイト仲間に頼まれた際、アルバイトを代わってあげたことが一度もありません。」

場面2：貸したお金の返済請求

「あなたは今欲しいものがありお金が必要になりました。そこで、友人に貸していたお金を返してもらおうと思っています。いま、友人が隣の席に座っています。あなたなら何と言いますか。」

- a) 正当性高文脈「ちなみに、今日は返す約束の期日を1週間以上過ぎています。」
- b) 正当性低文脈「ちなみに、あなたは『返すのはいつでもいいよ』と相手に伝えていました。」

場面3：飲み会の誘いの断り

「あなたは飲み会好きの友人に飲み会に誘われました。余り気が進まないのと断りたいと考えています。いま、友人が来週の飲み会に誘ってきました。あなたなら何と言いますか。」

- a) 正当性高文脈「ちなみに、前回誘われた際には、『今回だけでいいから』という友人との約束であなたは出席しました。」
- b) 正当性低文脈「ちなみに、前回誘われた際には、『次回は出席するから』と友人に約束してあなたは欠席しました。」

